Ⅳ－50　早池峰エコミュージアムにおけるサテライトの選定について

岩手大学　正　員　　安藤　昭
岩手大学　学生員　○中居　伸明
岩手大学　正　員　　佐々木栄洋
岩手大学　正　員　　赤谷　隆一

1. はじめに

近年、快適で豊かな地域社会の実現のために、自然と地域社会の人々が織り成す個性的で多様な地域文化を活用した地域づくりが模索されている。このような背景の中、エコミュージアムがその手法として注目され、全国各地で実践されている。

本研究は早池峰エコミュージアム基本計画案におけるサテライトの選定に関するプロセスや課題等を明らかにしていくものである。

2. サテライトの選定方法

サテライトの選定にあたり、早池峰エコミュージアム協議会を開催し、各回ごとに一定の選定条件（表-1）を設け、その条件に当てはまるのもを選出する方法を用いた。選定は先行研究において抽出された、約170程度の大迫町における自然・文化・産業の各遺産、および施設を対象とする。

早池峰エコミュージアム協議会は、大迫町民で各分野の有識者から構成される住民サイド、大迫町役場関係者・早池峰ダム建設事務所関係者の行政サイド、ならびに研究機関である岩手大学都市工学研究室により構成される。

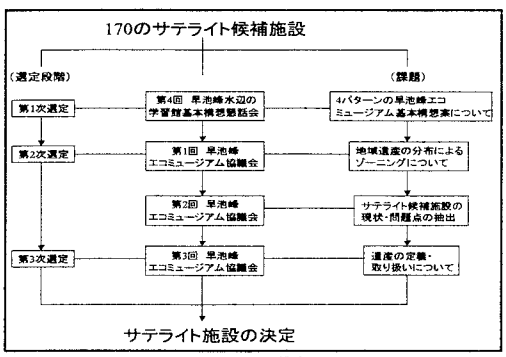

図-1　サテライト選定のフロー

表-1　サテライトの選定条件

検討委員会名	選定条件
第4回　早池峰水辺の学習館基本構想懇話会	・現存するものであること ・レクリエーション施設ではないこと
第1回　早池峰エコミュージアム協議会	・早池峰山を中心としたものであること ・独自の文化によって育まれたものであること ・伝承すべき遺産であること ・観光と迎合していないこと ・大迫町ことってかけがえの無いものであること
第3回　早池峰エコミュージアム協議会	・早池峰山、神楽、ワインのいずれかに関連のあること

3. サテライト選定のプロセス

早池峰エコミュージアム基本計画におけるサテライトの決定にあたり、4回（現地踏査を含む）にわたる早池峰エコミュージアム協議会（早池峰水辺の学習館基本構想懇話会を含む）を開催してきた。研究機関である岩手大学都市工学研究室側からはエコミュージアムの構造的側面について、また、住民および行政側からは大迫町の地域特性について意見を交換し、議論を重ね、選定条件を定めた（表-1）。約170のサテライト候補施設の中で選定条件に当てはまるものについて、次段階の選定を行うこととした。

3-1　第4回早池峰水辺の学習館基本構想懇話会

第4回早池峰水辺の学習館基本構想懇話会では、先行研究で行われた「4パターンの早池峰エコミュージアム基本構想案」（図-2）について論議が集中した。

図-2の4パターンのエコミュージアム案は、いずれもエコミュージアムにより期待できる効果であり、分類によってその機能を細分化する必要性は無いものとした。

また、サテライトの選定については約170施設から約110施設まで絞込みを行った。

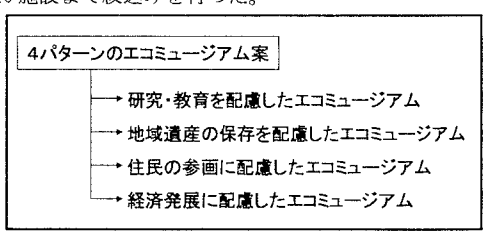

図-2　4パターンの早池峰エコミュージアム基本構想案

3-2　第1回早池峰エコミュージアム協議会

第1回早池峰エコミュージアム協議会では、地域遺産の分布によるゾーニング（図-3）について議論を行った。

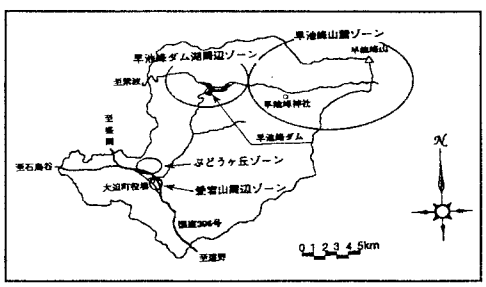

図-3　地域遺産の分布によるゾーニング

広大な領域を持つことが多いエコミュージアムにおいて、大迫町内に分布している遺産の位置関係等を明確にする目的から提案されたゾーニングであったが、エコミュージアムの観光化が懸念されることから、ゾーニングの必要性は無いという結論を得た。

また、大迫町におけるサテライト候補施設について、個々のものとして捉えるのではなく、生態系(ecology)の中から派生したものとし、その中から地域住民や来訪者が、何らかの結びつきを見出せればいい、との意見が挙げられた。さらに、研究機関である岩手大学都市工学研究室の提案は「早池峰ダム周辺環境整備の一環」として捉えているとの意見もあった。最終的には住民・行政・研究機関の三者間で、早池峰山を中心と考えていくことが地域住民のモチベーションの向上につながる、という合意を得た。

選定条件に、「観光と迎合しない」とある。これは、地域住民が観光手段としてエコミュージアムを利用することを否定したものであり、エコミュージアムによって地域アイデンティティーの回復・大迫町の魅力抽出の効果によって来訪者が観光を行うことを否定するものでは無い。

3-3　第2回早池峰エコミュージアム協議会

第2回早池峰エコミュージアム協議会では、第1回協議会で選出された15のサテライト候補施設(表-2)の現地踏査を行った。この現地踏査により、施設の現状・整備の必要性・地域遺産としての重要性等についての確認を行った。

表-2　第1回協議会で選出されたサテライト候補施設

名　称	分　類	名　称	分　類
早池峰山	自然遺産	桂林寺	文化遺産
薬師岳		南部たばこ史料館	
大償神社	文化遺産	山岳博物館	
郷土文化保存伝習館		大迫町縄文館	
早池峰神社		ベルンドルフブラッツ	産業遺産
神楽の館		ワインシャトー　大迫	
早池峰自然保護センター		大迫産直センター　アスタ	
田中神社			

3-4　第3回早池峰エコミュージアム協議会

第3回早池峰エコミュージアム協議会では、現地踏査を踏まえた上で、サテライト施設の決定を行った。自然遺産・文化遺産・産業遺産の各々に、大迫町民にとってかけがえの無いものを割り当てて柱とし、サテライト候補施設(表-2)のうち関連の深いものをサテライトとした。サテライトとならなかったものについては、コア館及びインフォーメーション程度にとどめておくものとする。

また、この協議会において議論の中心は遺産の取り扱いについてである。産業遺産としてワイン（ぶどう）産業を取り上げている。しかし、大迫町におけるワイン産業は近年になり盛んになったものであり、果たして「遺産」として取り扱って良いものか、という疑問が浮上し、協議の結果、以下のような見解を得た。

「エコミュージアムは大変ソフト色が強く、地域アイデンティティーの回復の一端を担う性質を持つ。そのため、本来の遺産の定義とは異なるものでも、地域住民が誇りを持ち、今後後世に伝えていきたいものであれば、エコミュージアムの遺産として取り扱う」

これによりワイン産業を産業遺産として、取り扱えるものとした。このことは、地域住民のエコミュージアムに対する関心を高め、住民のエコミュージアムへの参画意識を醸成させるものであると思われる。

以下に早池峰エコミュージアムのサテライト構造(図-4)、サテライトの分布(図-5)を示す。

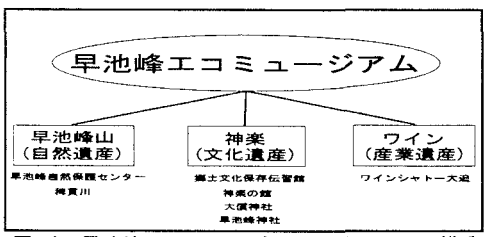

図-4　早池峰エコミュージアムのサテライト構造

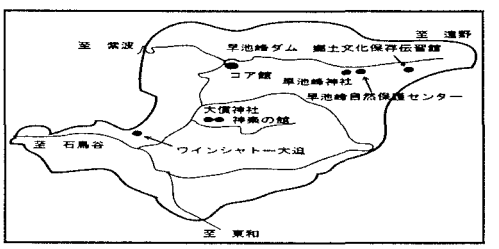

図-5　早池峰エコミュージアムのサテライトの分布

4　おわりに

エコミュージアムは非常にソフト色の強いものである。そのためにエコミュージアムを取り巻く環境、地域住民の周辺環境の変化の激しい今日、柔軟に対応することが求められる。今回、サテライト選定を行ったが、エコミュージアム設立にはコア館、ディスカバリートレイル等の選定も不可欠である。今後これらの選定を行い、早池峰エコミュージアム基本計画案を完成させ、地域住民へのエコミュージアムの浸透を深め、大迫町全域に根付いた早池峰エコミュージアムの完成を目指すものである。

【参考文献・引用文献】

1)　(財)東北開発研究所(2000):『早池峰水辺の学習館基本構想計画検討業務報告書』
2)　安藤昭・中居伸明・佐々木栄洋・赤谷隆一 (2000):『早池峰エコミュージアムにおけるサテライトの選定』、日本観光学会東北支部研究発表会　講演概要
3)　安藤昭・及川立一 (1999):『地域社会の発展に関する日仏エコミュージアムの比較研究』、土木学会東北支部技術研究発表会講演概要Ⅳ-67
4)　安藤昭・大泉剛 (1998):『エコミュージアムおよび道の駅の地域振興効果に関する比較分析』、土木学会東北支部技術研究発表会講演概要Ⅳ-69